

■COP21を機に

昨年末、12月12日、パリで開かれていたCOP21で2020年以降の地球温暖化防止の新たな枠組みとなる「パリ協定」が採択され、世界中がお祭り騒ぎの様でした。

パリ協定は概略、すべての国が2020年以降の温室効果ガスの削減目標を申告し、目標値を5年ごとに削減量を増やす方向で見直し、地球の気温上昇を産業革命前比で 2°C 未満(目標 1.5°C 未満、現在は同 $0.9\sim 1^{\circ}\text{C}$)に抑え、今世紀後半には CO_2 の実質排出量をゼロにすることを目指すと言うものです。日本は2030年までに2013年比で26%削減するとしています。さらに協定外目標ではありますが、先進国が途上国の地球温暖化対策に対して2020年まで年間1000億ドル(約12兆円)を支援するという事になっています。

安倍首相は官民合わせて1兆3千億の途上国支援を表明しています。官民の分担率は分かりませんが、民間が無償で支援することとは考えられません。少なくとも世界最高のエネルギー効率を持つ日本企業にとって、ビジネスチャンスとなりそうです。原子力発電、地熱発電、石炭ガス化複合発電、蓄電池、ゼロエネルギー住宅・ビル、省エネ家電といった省エネ製品・公害対策技術等のビジネスが期待されます。

なぜ、ここまでCOP21が騒がれるのかと考えてみますと、利益優先、効率優先の資本主義的な発想が行き詰まってしまったのではないのでしょうか。

旧約聖書の創世記にありますように「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」で人間が増えすぎてしまったのです。全知全能の神もここまで増えるとは想像できなかったのでしょう。

増えすぎた人間は、木を伐り燃料とし、森林を切り拓いて焼畑農業、あるいは牧場にしています。鉱物資源を手に入れるために山を崩し、石炭、石油をエネルギー源として使った結果、空気や水は汚染され、生物多様性は失われ、当の人間ですら喘ぎ、喘ぎ生きている始末です。

ここは日本的な発想で人間と自然の共生を真剣に考えなければなりません。

昔から日本では木を切った後、鉱山を掘った後は、山崩れを防ぐという意味もあったのでしょうか、必ず植林していました。また、わら、草、糞尿、その他廃物を積み重ね、たい肥として利用していました。自然と集落の間には、昔話によく出てくるお爺さんが柴刈りに行った里山がありました。まあ、こんな風に、つい最近、おそらく太平洋戦争前後ぐらいまでは、日本は自然に優しい生活を送っていたのですが、いつの間にか、効率優先の生活様式に変わってしまっており、その当時の生活に戻れなどと無茶なことは言いませんが、当時を振り返ることで、何か良いアイデアが出てきそうにも思えます。

最近、聞かなくなりましたが「地球船・宇宙号」という概念もありました。できるだけ、有限の化石燃料を使わず、風、水、太陽など自然エネルギーを使おうということだったと記憶しています。そうした発想で資源枯渇に至らぬよう延命策を講じつつ、抜本的な解決策を見つけるしかないようです。

ともかく、人間と自然は共生しないことには生きてゆけないのですから、京都議定書の時もそうだったように、今回も他の国の動向など気にせずに、真面目に取り組むべきだと考えております。その結果として、我が国に世界に冠たる省エネ、環境対策技術が残ると考えれば良いのです。急がば回れで、我が国で開発した技術がいろんな形で世界に伝播し、自然との調和を大事にする日本的な思想が世界に敷衍することとなれば、世界が和を以て貴しとする時代が必ず来ると信じて COP21 対応の技術開発に、新興国支援に取り組みましよう。